

藤沢周平

風の果て
(下)





文春文庫

192—21

風の果て(下)

定価はカバーに
表示してあります

1988年1月10日 第1刷

著 者 藤沢周平

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719221-7

と庫

て 果 の 風
(下)

平 周 沢 藤



秋 春 藝 文

下卷 目次

町見家

7

政 変

83

陰の凶面

121

天空の声

215

解説 皆川博子

252

風の果て

下巻

町見家

一

雨さえ降らなければ、桑山又左衛門は一日のうちに何度かは庭に出る。

何年か前に、郡代から中老にすすんでいまの屋敷をあたえられたとき、又左衛門がもつとも喜んだのは屋敷にひろい庭がついていたことだった。しかもごてごてと木や石で飾ったりせず、あっさりした築山つきやまのうしろに、素朴な雑木林を残してあるところが気に入った。文字どおりの雑木林で、そこには小檜や栗、えごの木、辛夷こぶしなどがあり、櫟の木までまじっていた。

雑木林は、四季の変化を敏感に映すだけでなく、晴天の日、雨の日、風の日と、それぞれに微妙な風情をみせる。むろん、絶えず小鳥がおとずれて、季節によっては騒々しいほどにさえずり合うのである。

長い間郷方回りの役人を勤めた又左衛門には、村の百姓なみにその日の天候を気遣う習性が

身についていた。朝起きて顔を洗ってから縁側に立ち、雑木林とその上にひろがる空の色からその日の天候を占う一刻が、又左衛門のひとに打ち明けたことのないたのしみになっている。

いまは雑木林は、あらまし葉を落としてしまっていた。歩いて行くと、足もとにかさかさと落ち葉が鳴った。又左衛門は立ちどまって上を見上げた。赤茶けた小檜の葉が、あちこちの枝にかたまつてしがみついているほかは、木々の枝はほとんど裸で、青い空に網目のような細い枝先をひろげている。

その枝の隙間に、網にかかった魚のように浮かんでいる白い月が見えた。位置からみて、日が暮れれば一刻も経たずに隠れる月であろう。又左衛門は、月を仰いでいるうちに昨夜の舟の上の斬り合いと、陸に上がったときの町の暗さを思い出した。

だが、昨夜の出来事は、さほどに又左衛門の胸に衝撃を残しているわけではなかった。事前に組頭の堀田衛夫から耳打ちされていて、そういうことがあるかも知れないと、気持ちの中で待ちかまえていたせいもあるだろう。過ぎてしまえば、おどろきは少なかった。又左衛門は藤蔵に他言を禁じたので、二人がそんな危ない目にあつたなどとは家の者も知らない。

——おどろいたといえは……。

あのときの方がよほどびっくりしたのだ、と又左衛門は、考えがどうしても若いころにあつた銀橋しろがねばしの上の斬り合いと、そのときに見た野瀬市之丞のことに流れて行くのを感じる。

そのころまだ隼太はやたといっていた又左衛門と、用人の牧原喜左衛門を襲って来たのは、小黑派

の男たちと後で判明した。五人の襲撃者の中から即死二人が出て、隠しようがなくなつたのである。

形から言えば、又左衛門はあの夜、あきらかに市之丞に救われたのだった。五人に襲われて市之丞が現れなかったら、牧原ともどもおそらく助からなかっただろう。

だが、又左衛門はそのあと市之丞をたずねることをしなかった。その夜の出来事には、たずねて行って市之丞に礼を言うことを憚るようなものが含まれていたのである。

野瀬市之丞が、あの夜偶然に銀橋に来合わせたなどということはあり得なかった。あきらかに、二重に牧原を護衛していたのである。だがそれは、又左衛門とはまた異なる理由から、ひとに言うことを憚る役目だったのだろう。だから、声をかけられるのを恐れるようにして立ち去つたのだ。忠兵衛が言った、陰扶持という言葉がそこに浮かび上がって来る。

それも市之丞をたずねにくい理由のひとつだったが、又左衛門にはもうひとつのこだわりがあった。その夜の斬り合いで、市之丞が二人もの命を奪つたことである。しかし襲つて来た男たちは、ひと口に言えば蹴ちらせばいい相手だったのだ。それを情け容赦なく殺害したところに、市之丞の剣の腕を知っている又左衛門は、ひとを斬ることに狎れ親しんだ者の、一種荒んだ空気を嗅ぎ取らずにいられなかったのである。

むこうが知らぬふりをするなら、こちらもそうした方がいいと、又左衛門は思った。しかし、そう思ったままつぎに市之丞と会うまで思いがけない長い月日が経つたのは、翌年から、いま

は天明の凶作と言っている未曾有みぞうの不作がはじまったせいだったろう。

「ただいまもどりました」

声がして、青木藤蔵が林の小道を又左衛門の方に近づいて来た。

「どうだった？」

「影も形も見えません」

と藤蔵は言った。藤蔵の顔には、朝から歩き回った疲れがうかんでいる。どことなく浮かない顔をしているのは、疲れだけでなく収穫がなかったせいもあるだろう。

「見つからんか」

「はあ、御城下にはおられないのではないかと思われます」

しかし藤蔵は、そこで気を取り直したように顔いろをひきしめた。

「もしおひまを頂けましたら、明日は八葉山まで行って来たいと存じますが……」

「海穩寺か」

「はい」

「やつめ、そこに案外もぐりこんでおるかも知れんな。行ってみるか」

と又左衛門は言った。

八葉山は、海に沿って北にのびる砂丘の根もとにある山で、高さはさほどでもないが懷が深く、古来真言宗の修験場として知られて来た。長い峰々と深い巖ひだをきざむ谷間に十五の寺院が

散在し、一山の寺院を統^すべる学頭が山麓の海穩寺だった。

市之丞が親戚の家のように入り出していた城下の祈願所光明院は、海穩寺の末寺になっていて、住職の徳栄は海穩寺で修行した僧である。

そのあたりのことはもう調べてあるらしく、藤蔵は明日は市之丞をさがしに海穩寺まで行くと言っているのだった。ひょっとしたらと、又左衛門も思わぬでもなかったが、ひとつだけうなずきかねるのは、八葉山の麓まで城下からざっと四里の道のあることである。隠れ家として絶好だといっても、ただ果たし合いの日まで又左衛門を避けるという、それだけの理由で市之丞がはたして足まめにそこまで行くだろうか、と又左衛門は疑う。

「実家をのぞいてみたか」

「はい。下男の才助に事情を聞きましたが、ここ三月ばかり、野瀬さまのお顔を見ていないそうです」

「山崎の家と、片貝道場、それに……」

「播磨屋^{はりまや}ですか。すべて回りましたが、立ち寄った形跡は皆目見当たりませんでした」

藤蔵は、又左衛門が挙げた、城下で市之丞を泊めて喰べさせておきそうな場所を、すべて否定した。

山崎というのは、十五年ほど前に市之丞が寺田一蔵の一件とは別に上意討ちの討手を命ぜられたときに組んだ相手で、以来昵懇^{じつこん}のつき合いをしていると聞く馬廻りの山崎作之進のことで、

また片貝道場を疑うのは、市之丞と道場の長いつながりを知っているからである。

道場は、道場主の片貝十左衛門が老齡を理由に隠居したあと、十左衛門には血縁がないので羽賀吉十郎が跡をついだ。その道場と、市之丞はずっとつながりを持ち、平井甚五郎、中根又市といった高弟たちの足が遠のいたあとは、羽賀を助けてしばらく師範代格で若い門弟に稽古をつけていたこともある。

もっとも、あるとき中根又市から聞いた話によると、市之丞が道場に入出入りするのには陰扶持を隠すための擬態で、そもそも陰扶持というそのものが、師匠の十左衛門の斡旋によるものだとも言ふ。その話が真実なら、道場と市之丞は切っても切れない縁につながっているのである。片貝十左衛門はもう七十を過ぎたが、まだ健在で、市之丞はいまも時おり道場に顔を出しているはずだった。数日身を隠しているのに何の支障もない場所である。

播磨屋と市之丞のつき合いの詳細は知らない。ただ又左衛門は、城下でも指折りの呉服屋である播磨屋が、市之丞がたずねると異様なほどに丁寧に待遇し、時には黙って三日ぐらいは泊めることを伝聞しているだけである。

「そうか。するとあとは、藤井庄六の家ぐらいかな」

と言って、又左衛門はにが笑いした。庄六はかくまえと言われればあるいは市之丞をかくまうかも知れないが、その家には行って来たばかりである。それに庄六の家は、ひとをかくまうには狭すぎるだろう。

「やはり、海穩寺まで行って来るか」

「はい、さしつかえなければ……」

「明日は二、三客が来るだけで、外に出る用はない」

と又左衛門は言った。

もどって行く藤蔵を、ちよつと見送ってから、又左衛門はまた道というほどのものもない林の中を歩き出した。

——姿を隠しているのは……。

まだ脈があるということだ、と又左衛門は思った。つかまえて話しこめば、市之丞は話のわからぬ男ではない。また、話を通じないほど冷え切った仲でもない。そのことを自分でも知っているから、市之丞は逃げ回っているのだらう。

又左衛門は雑木林の梢を仰いだ。枝にあたっている日射しが、いくらかさつきより濃くなっている。日が沈むところらしかった。そのとき、又左衛門の頭に、ぽっかりと浮かび上がって来たものがあつた。

市之丞がいるかも知れない場所で、一カ所だけ記憶から抜け落ちていたところがある。又左衛門は藤蔵を振りむいたが、藤蔵はもう林を出て、庭を横切っているところだった。呼びとめようとして、又左衛門はやめた。

——いや、あそこは……。

おれが直接に行つた方がいい、と又左衛門は考え直した。市之丞をたずねて、たった一度隠れ家のようなその家に行つたときのことを思い出している。それは、又左衛門が代官になつた翌年のことだつたのだ。

そこに住んでゐるらしいと、市之丞の実家で聞いて来た餌刺町は、ごみごみした職人町だつた。桶屋、指物師、漆塗り細工、表具師などの家がならび、町には木の香や砥との粉この匂いが漂つていた。この道を通り抜けると、日蔭町に出るらしいと見当がつきかけて来たところに、目印の町角の庚申塔こうしんとうが見えた。

聞いたとおりになつて曲がると、町は急に裏通りめいたひっそりした路地に変わり、槌の音や木の香も次第に遠のいた。そのあたりにあるのは、ほとんどがしもた屋だつた。

からからと、よく鳴る格子戸をあけると、玄関まで小砂利を敷きつめた路がある小粋な住まいだつたが、その家は日も射さず、陰気なほどに静かだつた。はたして中に市之丞がいるのかどうかと危ぶみながら、隼太は玄関の戸をあけて訪いをいれた。だが、家の中は森閑としてゐる。

二度、三度と声をかけると、ようやく奥の方で女の声が出た。声の主が出て来るまで隼太はまたしばらく待たされた。そして軽い足音がしてその女が姿を見せたとき、隼太は一瞬、家を間違えたのではないかと思つた。はげしい狼狽に襲われ、思わず背をむけてその家をとび出そ

うかと思ったほどである。女は宮坂の後家だった。もつとも宮坂の家は、一蔵の脱藩の始末がついたあとで、取り潰しになっている。

だが、女の方は少しもあわてなかった。平静な顔と声で言った。

「おひさしぶりでございます、桑山さま」

「ご無沙汰いたしました」

隼太はぎごちなく言った。

「お会いするのは何年ぶりでしょうか」

「されば……」

隼太は、そろそろ四十に近いはずなのに皺ひとつなく、相変わらずふつくと白い女の顔を、怪しむように見ながら言った。

「かれこれ十年近くにも相成ろうか」

「まあ、そんなに……」

女は眼をみはるようにした。その眼もきれいだった。

「ご出世のご様子は、よくご存じ上げておりますよ。おめでとうございます」

「いや、いや」

隼太は声を落とした。

「ところで、市之丞は在宅かの」